

追悼伊藤修四郎先生。高千穂宣麿最後の知己

保科 英人¹⁾

I. 高千穂宣麿を直接知る最後の昆虫学者・伊藤修四郎先生

決して届くことがなかった1枚の宅配便伝票が筆者の手元に残されている。宛先は大阪府立大学名誉教授の伊藤修四郎先生。品名は越前そば。筆者が福井市内某店にてお歳暮発送の手配をした一週間前の平成28年12月3日、伊藤先生は亡くなられたと聞く。まずは心より先生の御冥福をお祈りしたい。

故伊藤修四郎先生は双翅目を中心とした昆虫学分野の多くの研究論文を残された。また伊藤先生は『原色日本昆虫図鑑(下)』の編著者の一人でもある(伊藤ら, 1977)。昨今チョウやトンボ、カミキリムシ、ハナバチなど分類群ごとの大図鑑の出版が相次ぎ、全国の虫屋の財布の容量を著しく浸食している。近年デジタル撮影技術頗る向上し、これら大図鑑掲載写真の高質なること目を見張らばかりである。その一方で、非人気昆虫のハエやシリアゲムシ類となると纏まった図鑑が未だ見当たらない。そういった意味では、お世辞にも標本写真が美麗とは言えぬが、昆虫学入門書としての伊藤ら(1977)の価値は今なお衰えていないと称せよう。

世間で一応甲虫屋と目されている筆者は伊藤修四郎先生の教え子でなければ、採集をご一緒した経験もない。先生が現役時代教鞭を執られた大阪府立大学とは何の所縁もない。そんな筆者が伊藤先生の知遇を得たのは平成26年12月。その頃筆者は九州帝国大学附属彦山生物学研究所(現在の九州大学農学部附属彦山生物学実験施設)の実質的設立者である博物学者高千穂宣麿男爵(1864-1950)について調べていた。大東亜戦争中、伊藤修四郎先生が彦山生物学研究所に勤務しておられたことを知った筆者は当時の様子を聞きたいと伊藤先生に御手紙を出した。先生は快く筆者の自宅訪問を許していただき、筆者は先生から高千穂宣麿に関するヒヤリングを行った。その成果が保科(2015; 2016)である。

平嶋義宏九州大学名誉教授や黒子浩元大阪府立大学教授など戦争直後の九州大学農学部昆虫学教室で学んだ方々の何人かは御健在だが、これら長老の先生方はいずれも高千穂宣麿と直接の面識をお持ちでない。これは保科(2015)で言及したように、高千穂宣麿と九大昆虫学

教室との繋がりには、高千穂と江崎悌三(同教室初代教授)との個人的な交友関係にすぎないとの性格が強かったからだろう。それ故か、上述の長老の先生の中で昭和25年に死去した高千穂の葬儀に出席した方はおられない。そう言った意味で、伊藤修四郎先生は高千穂宣麿と親しい交流があった最後の虫屋ではないかと思う。

筆者が伊藤先生に親交を持っていたいただいたのは、先生最晩年の2年間に過ぎない。その間、書簡や電話の交換は多々あれど、直接お会いしたのはたったの1回。そんな筆者に果たして伊藤先生の追悼文を書く資格果たしてありや、との批判は甘んじて受けるしかない。ただ、伊藤先生からは高千穂宣麿とは関係がない御自身の九州帝大時代の思い出話も随分としてくださった。本稿は保科(2015; 2016)と重複する箇所も多いが、先生から伺った大東亜戦争中の彦山生物学研究所の様子などを中心とした回顧談を追悼文との形で紹介したいと思う。一方、先生の経歴や研究業績の詳細については、いずれ直系の弟子の方々や大阪府大関係者が書かれるであろうから、それらについては本稿では言及しない。

なお、本稿で記す内容の殆どは筆者が伊藤先生に御話頂いたこと、そして筆者が手記した内容を後日先生に郵送し添削していただいたものである。当然のことながら、70年も前の出来事を筆者自身が直接見聞きしたわけではないので、本来なら以下の全ての文の末尾に「～らしい」「～と言う」「～だそうだ」と付けなければならない。ただ、同様の語句の反復は読み手書き手ともに煩わしい。これら伝聞の助動詞の大半は形式上省略されているものと御理解頂きたい。そして、この手の文章の通例に従い、伊藤先生以外の登場故人には原則「～先生」などの敬称を付けていないことを御了承願う。

II. 大東亜戦争中の伊藤修四郎先生

伊藤修四郎先生は大正9年生まれ。昭和19年9月15日、戦時特例の就学期間半年短縮で九州帝国大学農学部を卒業された。卒業の翌日には副手嘱託となり、同年11月30日付で九州帝国大学附属彦山生物学研究所の事務嘱託(兼務)を拜命、同研究所にて昆虫学の研究

¹⁾ Hideto HOSHINA 福井大学教育学部

に従事する事となる。なお、健康上の理由で伊藤先生は軍隊に徴集される事なく終戦を迎えた。

伊藤先生が英彦山勤務を希望されたのは、学生時代から昆虫学教室の1年先輩で夜蛾類を研究していた福島一雄氏と共に、幾度も同山で昆虫採集をしていたからである(注1)。また、春吉(現在福岡市中央区)の下宿先の女将が病気で亡くなり、下宿事情が悪化したとの事情もあった。

博多の伊藤先生の下宿はなんと安松京三(九大昆虫研第二代教授)の自宅と路地を挟んですぐ向かいであった。先生が九州帝大に入学した時、昆虫学教室の先輩が既にこの下宿に入っていた。つまり、先生の下宿先は自動的に決まったようなものだったと言う。

学生たちの下宿と安松家との路地は狭かった。そこで安松は自宅を出ることなく部屋の窓から「おい、お菓子があぞお(≡ウチに食べに來い)」と路地向かいの伊藤先生を呼んでいた。つまり伊藤先生は公私共に安松に世話になっていたわけであるが、別の見方をすれば24時間監視されているようなものである。筆者が同様の環境に置かれれば間違いなく窒息死してしまう。そこで筆者が「家でも大学でも安松先生に見張られて嫌ではなかったのですか?」と問うと、伊藤先生曰く「そのような感覚は全くなかった」との事であった。伊藤先生の師に対する敬意の大きさは桁外れである。実際、筆者は伊藤先生のご自宅に飾られている江崎・安松両教授の写真を見た。先生の師への思いについては後述することとしよう。

一方の江崎に関する思い出である。当時昆虫学専攻の学生が少なかったせいか、江崎は個々の学生に対する細かい目配りができた。江崎は帰宅の際に階下の学生実験室に立ち寄ることがあった。そして、伊藤先生は江崎と一緒に福博電車で一緒に帰途に着き呉服町あたりで共に下車し、コーヒーを御馳走になることがあったと言う。また、伊藤先生は江崎のドイツ人の義父(シャルロツテ夫人の実父)が豊前坊高住神社で馬の銅像にまたがった写真を見せてもらったことがある。伊藤先生は「日本人ではとても真似できないことをするなあ」と感心されたそう(注2)。確かに宗教心が薄い日本人と言えども、神社境内の銅像にまたがるのは躊躇するのが普通だ。

伊藤先生が昭和19年初冬に英彦山に赴任される頃、高千穂宣麿の自伝が編集されていた。戦後に『鶯嶺仙話』との名で出版される自叙伝である(高千穂, 1946)。昭和18年、高千穂の数え年80歳の祝賀として九州帝大教授の江崎悌三が自叙伝の出版を高千穂に持ち掛けたい。江崎と安松京三の両名が英彦山を訪問し、改めてヒヤリングを行ったのは昭和18年夏だが、実際に自伝が世に出たのは戦後の昭和21年である。出版に3年かかったのは戦争中の物資不足との事情もあったであろう

が、直接的には「原稿や原図が祝融の見舞ふ所」、つまり原稿が一度火災で失われたからである。江崎は原稿焼失の後、単に原稿を復旧させるだけでなく、自伝に載せる図の追加を指示するなど、少しでも良い自伝を出版すべしと考えていた。

英彦山勤務開始の前か後かは不明だが、伊藤先生は江崎から高千穂の自叙伝に載せる捕虫網の追加スケッチを指令された。その時、江崎は伊藤先生に「絵にはちゃんとシャドーを付けろ」と注文するなど、並々ならぬ凝りようであったらしい。ただ、伊藤先生の手によると思しきスケッチは『鶯嶺仙話』のどこにも掲載されていない。原因不明ながらどこかの段階で没となったのであろうか。

大東亜戦争当時、福岡市街から彦山生物学研究所への移動手段は国鉄に乗車した後、最寄りの駅からの徒歩であった。昭和10年代初めには既に鉄道の駅と英彦山を結ぶバスが運行していたが、伊藤先生は駅から歩いて研究所に向かった。その徒歩に要した時間はよく覚えておられなかった。昆虫学教室の学生が英彦山に行く際には、安松が彦山生物学研究所の小使である広津一松夫妻にあらかじめ電話連絡をし、広津一松は駅まで学生を迎えに来ていた。福岡から彦山生物学研究所まで一日がかりの移動であったが、駅から英彦山までの道は悪くなかったらしく、特に辛いとは感じなかった。また、少なくとも戦争中に伊藤先生が英彦山と博多を行き来した際には、空襲で線路が破壊されて不通になったとか、敵機の攻撃を避けるため途中の駅に長時間退避を余儀なくされたといったトラブルは生じなかった。

当時、伊藤先生を始めとする九州帝大昆虫学教室の学生は、彦山生物学研究所で宿泊する行き帰りには必ず高千穂宣麿の自宅を訪問し挨拶する事になっていた。学生たちの高千穂邸訪問はあくまで挨拶であって家に上がって話し込む事はなかったが、高千穂は学生たちの訪問を大変喜んだと言う。

当然、彦山生物学研究所勤務となって以降、伊藤先生が高千穂宣麿に会う機会は増えた。伊藤先生は京都市出身で、実家は京都西陣の帯地商であった。そして、高千穂は清華家の一つである公家の徳大寺家の次男として幕末に生まれ、その後、英彦山神社宮司の高千穂家に養子に入った経緯がある。よって、高千穂もまた京都生まれであり、同郷出身との事で伊藤先生は特に可愛がって貰えた。ただ、7歳で京都を離れ東京に移転した高千穂に京都時代の思い出は乏しかったらしく、伊藤先生には高千穂と京都ローカルの話で盛り上がった記憶はない。

伊藤先生は高千穂宣麿の自宅に招かれ食事を御馳走になる事もあった。高千穂は昆虫学を志す若者の来訪を大歓迎した。宣麿が高千穂家に養子に入った時にあった部屋の置物や調度品が一週間でも無くなった、高千穂家は

名門徳大寺家から養子を迎えるにあたりどうやら体裁を整えるために借り物で当座を繕っていた、との有名な話が『鶯嶺仙話』に掲載されている。これは九大関係者の多くが知るエピソードなのだが、伊藤先生はこの話を高千穂から直接聞いた。

正妻を亡くしていた高千穂宣麿には、当時後妻的立場の女性がいた。伊藤先生は彼女を「奥様」と呼んでいた。この女性と江崎のシャルロッテ夫人の間には相当な親交があったらしい。伊藤先生はある時江崎の自宅を訪れた際、シャルロッテ夫人から「高千穂男爵の奥様から、お菓子の作り方を教えて欲しいと頼まれています」と言われた事があった。そこで、伊藤先生はシャルロッテ夫人が作り方を口述するのを紙に書き取り、英彦山に届けた。レシピを紙に書く際シャルロッテ夫人は、日本語の「てにをは」について「『を』ですか？『に』ですか？」と助詞の用法を伊藤先生に尋ねた。先生は、日本人がドイツ語の3格支配か4格支配かを悩むのと同じだと感じた。

なお、親しい虫屋仲間の間柄とは言え、江崎と高千穂の間には親子程度の年齢差があり、かつ平民と華族との“身分差”もまた存在する。よって、江崎が男爵の高千穂に対し如何なる態度で接していたかは興味があるところだ。しかし、残念ながら江崎と高千穂が共にいる場面に伊藤先生は出くわしたことがないので、その点については不明と言うほかない。また、江崎と安松は別々に英彦山に来ることが多かったらしく、伊藤先生はこの二人が同時に英彦山にいる姿もまた目にすることがないと言う。

伊藤先生の英彦山での日々の生活については、彦山生物学研究所の小使いである広津一松夫妻の世話になっていた。広津一松は英彦山のふもと出身で元は大工だったらしく、手先が器用だった。また、猟犬を飼い銃を持って狩猟をするほか、英彦山の昆虫や鳥に通じており、伊藤先生は広津から昆虫の採集場所や鳥の名前を教わった。ただ、伊藤先生は広津の狩猟に何回か同行したが、どうもタイミングが悪く、自分の目の前で狩猟に成功したことはなかったそうだ。

戦争中、英彦山が位置する添田町は農村部とは言え、供出による物資不足により御多分に漏れず食糧事情は悪かった。しかし、ある意味下界から離れ、山の恵みに与れる英彦山の食べ物事情は多少マシな一面もあったらしい。小使いの広津が研究所前庭で収穫したネマガリダケの子を茹でた後に乾燥させた保存食があったし、他の猟師が捕ったシカの内臓料理の御相伴にあずかる事もできた。この内臓料理は地元の猟師しか口にできない珍味であったそうだ。もっとも、筆者が「シカの内臓なんかは美味しいのですか？」と尋ねたところ、伊藤先生は「う～ん」と首を傾げられた。旨くはなかったのだろう。

当然肝心の肉は食わせて貰えなかったのかとの疑問がわく。筆者はこの件につき伊藤先生に改めて問い合わせようと考えていたが、最早それは叶わぬ事である。何はともあれ、伊藤先生自身は、決して豊かではなかったけれども、戦争中の英彦山でありあまりひもじい思いをせずに済んだらしい。もちろん、これには小使いの広津夫妻の献身的な世話があったが故である。

英彦山の住民には煙草の配給もあった。伊藤先生は煙草を飲まれぬ方であったが、広津一松に「煙草を吸っているところをなるべく周囲の皆さんに見せてください」と言われ、やむなく吸った。これは伊藤先生配給分の煙草を広津が不当に横領しているとのあらぬ疑いを避けんがためであった。

一方、彦山生物学研究所の備品についてであるが、昆虫針やナフタリン、青酸カリなど昆虫標本の整理に欠かせない物資は備えられていた。伊藤先生は総じて研究面でも英彦山滞在中に大きな苦労はされなかった。

大東亜戦争中、英彦山は時が緩く肅々と流れていたのか。何分山の上なのでアメリカ軍の空襲なんぞあるはずもなかった。伊藤先生自身にも「博多が空襲に遭い西の空が赤くなった」程度の情報しか入ってこなかった。先生は夏には研究所庭園の池で泳いで遊んでいた。さすがにこのやんちゃぶりについては伊藤先生自身、筆者への手紙の中で「若気の至り」と照れられている。

上記のように英彦山は食べ物が豊かでないながらもそこそこあり、伊藤先生自身は幸運にも戦争の悲惨な現実には晒される機会があまりなかった。例えば、英彦山神社は社格が官幣中社の由緒正しき神社なので、英彦山の若者が赤紙で徴集されれば境内で武運長久を祈る出征式のような儀式はあったと思われる。しかし、英彦山神社と彦山生物学研究所は近隣とは言え隣接しているわけではない。伊藤先生は戦争関連の神社神事に立ち会ったことはないと言う。

また、伊藤先生は高千穂宣麿と度々会談していたにも拘わらず、その中で大東亜戦争の現状に関する話題が出たか否かも覚えておられない。実は、筆者が伊藤先生にヒヤリングを行った最大の動機は「高千穂宣麿が敗色濃い帝国の行く末をどう憂いていたか」を知ることであったが、それについては手掛かりを全く得られなかったわけである。

1点、伊藤先生は戦争中大きな家庭の不幸に見舞われた。昭和20年3月末に御尊父を亡くされたのである。その頃、先生の二人の兄君は出征中であり、先生が家を背負わねばならなかった。先生は父死去の電報を受け(死に目には会えなかった)、すぐに京都へ帰京し葬儀を済ませたわけだが、家長的立場ともなれば後始末等の仕事がある。すぐに英彦山へ戻るわけにはいかない。すると、安松から電話がかかってきて「早く福岡に帰ってこい」

と叱られたそうだ。

昭和 20 年 8 月 15 日。この日、大日本帝国は終局を迎えた。終戦の日、伊藤先生は英彦山におられたのは確からしいが、自分の耳で玉音放送を聞いたのか否か、聞いてないのであれば自分はどのようにして敗戦を知り、またどう受け入れたのか。その日自分は何をしていたのか。そして祖国の降伏との過酷な現実を突きつけられた英彦山の人々の面持ちは如何なるものであったのか。残念ながら伊藤先生はこれら全てについて記憶をお持ちでなかった。終戦を迎えてもなお、英彦山は戦争とかけ離れた静寂の境地にあったと言ふべきなのだろうか。

III. 終戦後の伊藤修四郎先生。師に別れを告ぐ

伊藤先生の英彦山生物学事務嘱託勤務は、書類上は昭和 19 年 11 月 30 日から昭和 22 年 7 月 22 日までである。しかし、先生は終戦直後の昭和 20 年 11 月には結婚を機として英彦山を離れるよう指示があり、福岡市箱崎の九大昆虫学研究室に戻られた。その時、結婚のお祝いとして高千穂宣麿から花瓶を貰った。箱崎に戻ると研究室で炊事をして、小使部屋で大学院特別学生だった森津孫四郎（のち山口大学教授）と一緒に住み、宿直手当を貰うとの生活が始まった。伊藤先生は筆者への書簡の中で「何とも妙な生活」との文言で当時を回想されている。

終戦の翌々年の昭和 22 年春、九州大学で園芸学会大会が開かれ、学会に参加していた大阪農業専門学校（現在の大阪府立大学生命環境科学部の前身）の仙田校長の人材派遣の依頼を受けた江崎が伊藤先生を推薦し、同校への赴任が決まった。当時、日英語両方の教職員適確調書 2 通を提出して GHQ の審査を仰ぐとの制度があり、昭和 22 年 7 月 22 日とは伊藤先生のその合格通知の日付であった。大阪への赴任までに時間がかかったのはどうも戦争直後の郵便事情の悪さが関係していたらしい。つまり、伊藤先生の彦山生物学研究所勤務は、書類上はともかく実質 1 年間であった。以降大阪府大で伊藤先生がどう研究業績を積み重ねられたかについては同大とは全く無縁である筆者が書くべきことではないだろう。

GHQ から合格通知を受領する一か月前のこと。伊藤先生の江崎・安松の両教授に対する敬愛ぶりを窺わせる一つの資料がある。伊藤先生は九大昆虫学教室から大阪に赴任される際、同教室のノートに師を慕う一編の詩を残された。そこには「師の君の御膝の元を離り行く吾が心どの喩へ兼ねつも 不知火の筑紫戀しみ始めてし訪ひ来し朝ゆ五年を経ぬ（後半略）。昭和二十二年六月二十七日 伊藤修四郎」とある（写真 1）。筆者が母校の九大昆虫学研を訪問したのは平成 27 年 5 月末で、湯川淳一名誉教授もその場におられた。湯川先生はこの詩を見て「おい、こんなに弟子に想われるとは師の冥利に

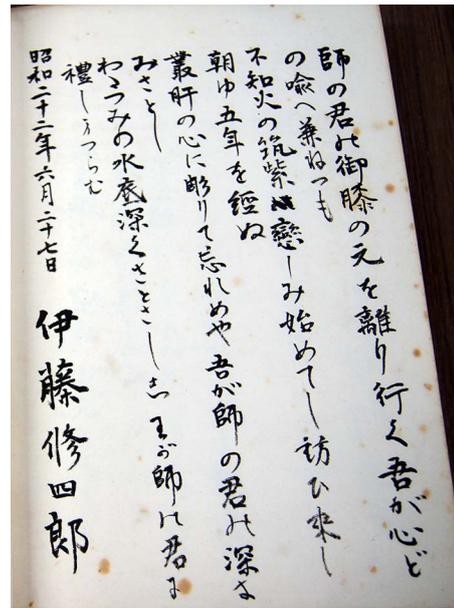


写真 1 九州大学農学部昆虫学教室所蔵の来訪者ノート。伊藤先生の詩の左のページには愛媛大学教授だった石原保の記帳がある。

尽きるな」みたいな感想を述べられたが筆者も全くの同感だ。さらに筆者がこの写真を伊藤先生に送ったところ「江崎・安松両先生に対する想いは今も何も変わっていないと改めて実感しました」との返事が来た。伊藤先生の二人の師に対する際限なき敬意は筋金入りである。時代が違うと言ってしまうとそれまでだが、江崎・安松両教授の偉大なるカリスマを改めて思い知らされた。

詩心なんぞカケラもない筆者に伊藤先生の詩の評価はできないが、現代人の目を引くのが伊藤先生が示した教養である。写真 1 の詩の冒頭 4 文字目は「能」を字源とする「の」の変体仮名だ。変体仮名とは明治 33 年小学校令施行規則で採用されなかった旧仮名なので、大正 9 年生まれの伊藤先生は初等教育で身に着けられたわけではないはずだ。文学その他で知った旧仮名を、博多を去る際に意識的に己の詩に用いられたと思われる。

IV. 物を無駄にされなかった伊藤修四郎先生

筆者は伊藤先生にお会いするまで先生は温厚質実な方との印象を抱いていた。それは決して間違いではないのだが、最晩年の先生が「最近カラオケによく行っている」と言われたのにはいささか驚いた。どうも近所の方々との付き合いとの意味合いがあるらしい。先生が心底カラオケを好きなのか否か、また店では一体何を歌っていたのかは結局聞けずじまいである（まさか AKB ではないと思うが）。

先生の御自宅の中は虫屋らしくモノが散乱し相当散らかっていた。もっとも「人生がときめく片づけの魔法」(by 近藤麻理恵)にかかるとなると輩は虫屋になる事能はず。断捨離？何ですかそれ？と言うのが筆者の信念である。先生は虫を今は殆どやっていないと言われなが

らも、やっぱり虫の標本類や飼育用シャーレがそこら中に転がっているし、御自身の最近の論文の別刷りなどもすぐに取り出せる状態にしてあった。この他、奈良県斑鳩町にお住まいとあってか、仏像や寺院にも強い興味をお持ちで、その関連の本格的図鑑なども少なからず室内に見受けられた。写真やカメラなども好きだったようで、自慢のコレクションを随分見せていただいた。

先生の御趣味や人柄についても、弟子でも何でもない筆者がつつらと述べることはないだろう。本稿で一つ述べさせていただくとすれば、戦前生まれであるが故の物を大事になされる先生の御心であろうか。器用な先生は近くの公民館等で展示したいいくつかの工作物を残されていた。そのうちの一つが電気式の手作り回り灯籠で、コンセントに差し込むと中央部のライトが点灯して、その周りの紙円筒に描かれた魚（金魚？）が回転するというヤツだ。暗い中で見ればより引き立つのだろう。ただ、間抜けと言うか、灯籠の隙間から中央部の紙製の回転円筒部を覗き込むと、それが雪○チーズの空箱の廃品利用であることに気付いた。先生は筆者の僅かな苦笑を見逃さず、「僕の世代は物を無駄にできないから」と笑われたのが印象的である。

筆者が先生の御自宅を訪問した時、先生自らが調理された昼食を頂いたことを紹介して筆を置きたい。先生は年金生活とは言え経済的に困窮されていたとは思えないし、一応筆者も社会人である。昼食となれば先生なり自分なりがカネを出して出前の寿司でも取るのが普通だと思うが、先生はそうされなかった。90歳を超えた御年配の男性の手料理である。見た目良いわけでもなく特別豪華なわけでもなかったが、先生の手料理は筆者の記憶に長く刻み込まれることだろう。

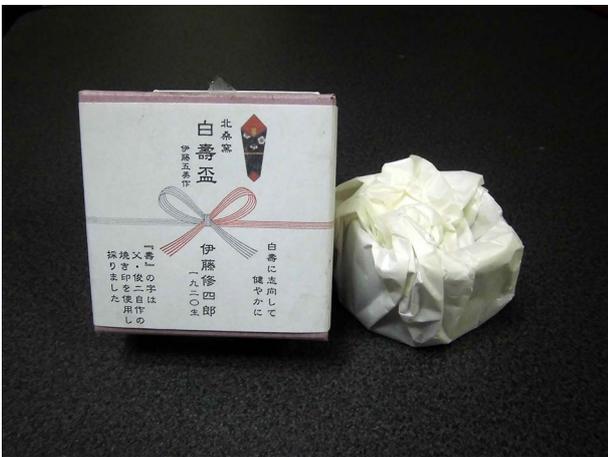


写真2 筆者の贈物の返礼として故伊藤修四郎先生に頂いた盃。陶芸家である甥御の方が制作されたもの。

V. 謝辞

故伊藤修四郎先生の命日をご教示くださり、また追悼文の執筆を勧めてくださった大阪府立大学卒業生の澤田義弘博士に厚く御礼申し上げる。

VI. 注釈

(注1)「彦山」「英彦山」とも読みは「ひこさん」である。名称として古いのは「彦山」であるが、江戸中期に「英彦山」となり、以降「英彦山」の3文字表記の方が一般的となった。もっとも、JR九州の彦山駅や日田彦山線、九州大学農学部附属彦山生物学実験所など、現在でも「彦山」の表記は残っている。本稿では表記を厳密に統一せず、事例に応じて使い分けた。

(注2) 筆者は江崎先生の御遺族に該当しそうな写真があるかを尋ねたが、結局見つからなかった。また、現在の豊前坊高住神社には牛の像はあるが馬の銅像はない。伊藤先生の記憶違いの可能性はあるか。ただ、豊前坊高住神社は近代の文献資料や写真が殆ど残っていない。近隣住民の記憶も定かでないらしい。よって、戦前には確かに同神社に馬の銅像があり、戦争中の金属供出で撤去されただけ（＝伊藤先生の記憶は正しい）と考えることも可能だ。

VII. 引用文献

- 伊藤修四郎・奥谷禎一・日浦勇編著, 1977. 原色日本昆虫図鑑(下). 保育社. 385 pp.
- 保科英人, 2015. 博物学者高千穂宣麿先生小傳. 日本海地域の自然と環境, (22): 133-223.
- 保科英人, 2016. 若人に託した科学一等國の夢～昆虫男爵高千穂宣麿の生涯. きべりはむし, 38 (2): 38-47.
- 高千穂宣麿, 1946. 鶯嶺仙話. 九州帝國大學附属彦山生物学研究所. 130 pp.